

「我がこと」に結びつけた国語の授業で、自己理解を深めながら伝える力を高める

社会に出てからも教え子たちが伸び伸びと意志表明していけるようになるには、何が必要なんだろう？ そんな意識のもと、学校行事から流行や外部交流まで、すべてを学びの題材にして進められている授業がありました。

取材・文／松井大助
撮影／竹内弘真



国語
伊藤久仁子先生

1965年生まれ。国語の指導や、キャリア意識を高める小論文指導に取り組む。他校と短歌創作で交流する国語の授業実践で、第48回読売教育賞最優秀賞受賞。健康保健部で、養護教諭やスクールカウンセラーと連携した相談活動にも注力。

修学旅行中の短歌で 土佐日記が身近に

共立女子第二中学校・高校にはある伝統がある。修学旅行に出かけた中学3年生が、その道中で感じたことを短歌または俳句にして、1日1首1句、書きとめるのだ。

作った歌は、学校に戻ってからホームルームなどで振り返っていたが、今年度は伊藤先生と学年の先生が打ち合わせ、国語の授業に活用することになった。そこにはどんな意図があったのだろうか？

授業が始まると、伊藤先生は生徒たちの作品を戻し、ワークシートを配った。

「このシートに、作った歌を清書して、その歌の説明も書いてください。説明はほかの人が読んでもわかるようにしてね」

「そこから自分の自信作を1首選んで、『選んだ理由』も書いてください」

「それも終わったら、今度は隣や前後の人とシートを交換して、相手の歌の中でいいなと思うものを1首選んで、『選んだ理由』も書いてください」

生徒たちは最初こそ黙々と作業していたが、友達の歌を選ぶ際には「これ、おもしろい」などと話を弾ませていった。伊藤先生も巡回しながらその声を拾う。

「自分で選んだ歌も、ほかの子が選んだ歌も、みんな同じだった人はいる？ 各自が選んだ歌が、全部違った人は？ 意見が一致するのうれしいし、違う視点にふれるのもいいよね」



創作した短歌を生徒同士で選歌させると、さまざまな理由でお気に入りを選ばれる。表現がうまい、視点がおもしろい、共感できた。生徒は「選ぶ」ことも表現の一つであることを知り、自分の表現が人に受けとめられるうれしさも実感する。

さらに伊藤先生は、旅から学んだことを200字にまとめる課題を出した。そして授業時間が残り10分近くになると、「じゃあ、このあいだの文学史の続きをやりますね」と切り出した。

きょとんとする生徒たち。「え、今日それやるの？」とこぼした生徒もいた。

「なぜ今日やるかというとね、旅の文学は紀行文というんだけど、このジャンルで覚えてほしい古典があるからです。一つは紀貫之の『土佐日記』。和歌と、その歌を説

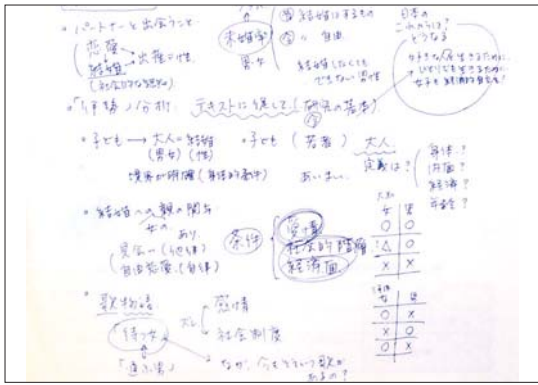
明する散文からできています。もう一つは松尾芭蕉の『おくのほそ道』。俳句と散文からできています。今日やったように、旅先で歌を作って、そこに説明を加えるというのは、日本の伝統的な旅文学の作り方なんでしょう」

学年行事、体験を言語化する学習、文学史の勉強。伊藤先生はそれらをつなげ、いくなれば学びの相乗効果を狙ったのだ。

伊勢物語と恋愛ソングから女性の生き方を考える

同じ日に、高校1年生の授業で教えたのは『伊勢物語』。和歌とそれにまつわるストーリーからなる歌物語で、第二三段「筒井筒」では、一人の男性と、彼を待ちしぬ二人の女性が出てくる。

はじめに伊藤先生が文法のポイントを



上のメモ書きは、指導案とは別に、伊藤先生がこの日の授業に備えて、話のネタを書きとめたもの。授業で必ずしも全部話さずだけではなく、生徒の反応に合わせてネタをふっていく。その結果、生徒の興味・関心が高まると、古文の音読でも、生徒はこれまで以上に話に引き込まれながら文章を追っていく。

説明し、指名した生徒一人につき「文ずつ訳させて、話の内容をみんな把握した。そのうえで伊藤先生は「こういふ『待つ女』ってどう?」「まわりにいない?」と投げかけた。生徒は「かわいそう」「いるかなあ」などの感想を述べるが、あまり興味がないようで、反応は鈍い。

それを見越していたかのように、伊藤先生は用意していたプリントを配った。するとその意図を察した生徒たちが、はじけるように笑い出した。紙に載っていたのは、西野カナの楽曲『会いたくて会いたくて』の歌詞。大好きな「君」が「あの子」のもとに去り、会えなくなったらしい人の心情が描かれている。

「たしかにこの歌の人、待ってる!」
「この歌、超泣けるっていう人いたよ」
盛り上がる生徒たちに問いかけた。
「この歌の人って、どんなシチュエーション

にいると思う? 歌から読み取れることを考えてみて。この歌詞からこう考えたという根拠がないとダメだよ」

今度は生徒からどんな意見が出た。「別れた恋人に『あの子』という新しい彼女ができたのに、まだその人が好き」「しかも『あの子』がきつと自分よりかわいいんだよ。切ない!」「男が二股しているとも読めそう」「遠距離恋愛中に浮気されたのかい」と願っても会えないなら、実はこの男性はもう死んでいる?」「あの子と一緒天国にいくってこと!」

話を引き継いで伊藤先生が解説する。「この歌詞は『君』『あの子』のように、固有名詞をあえて使わないことで、聴き手が自分に合わせて想像しやすいようにしているよね。『伊勢物語』も同じ。登場人物が名前ではなく『男』『女』として描かれて

います。そして今みんながやったように、歌から連想されるストーリーをまとめてできた作品なんです」

伊藤先生としてはさらに生徒に聞いたことがあったが、話が盛り上がりすぎて時間が足りなくなったので、そこは次回にまわし、最後にみんなが『伊勢物語』を音読して授業を終えた。

「昔の『伊勢物語』にも今に通じる部分があることがわかり、生徒もこの教材を『我がごと』に近づけて考えられるようになったと思います。ですので次回は『あなたならどうする?』と尋ねます。生き方のチョイスですね。恋愛や結婚をどうとらえるか。愛情、社会的階層、経済力など、相手に何を求めるか。過去や現在を踏まえながら、生徒が自分たちの未来まで考え、というところまでついで、この単元を終わせます」

高校1学年、古文授業の展開

1 古文の学習

- ・文法や語彙を説明する
- ・生徒に口語訳をさせる
- ・物語に対する感想を募る



2 教材と生徒の興味のリンク

- 古典と恋愛ソングの共通点を示す
(待女というテーマの普遍性、表現手法の工夫の共通点)



3 生徒による未来の考察

- ・古典で描かれた生き方をどう感じたか改めて問う
- ・自分の未来のイメージを問う
- ・考えたことを200字でまとめさせる

生徒が授業を通して考えたことや感じたことを、伊藤先生はいつも最後に文章にまとめさせる。そしてその感想の抜粋を後日、生徒たちと共有している。

東京都・私立 共立女子第二中学校・高校



School Data

普通科/1970年創立(中学校は1984年創立)
生徒数(2012年度)884人
(女子のみ中学生302人・高校生582人)
進路状況(2011年度実績)
大学84%・短大10%・専門学校等2%・予備校等4%
東京都八王子市元八王子町1-710
TEL 042-661-9952
URL <http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/nichukou/>

Outline

東京都八王子市に広大なキャンパスをもつ私立中学校・高校。共立女子大学・短期大学の系列校で、全体の約50%が同大学・短期大学に進学する。共立女子学園創立時の理念である「女性の社会的自立」を目指すとともに、充実した施設や豊かな自然環境を生かし、伸び伸びとした教育のもとにバランスの取れた人間の育成に取り組む。高等部は、難関大学を目指す生徒向けのクラスと、多様な進学志望にこたえるクラスに分かれる。



HINT & TIPS

1 意見や表現が受容される場を作り、意志表明への安心感と自信を育てる

「自分の意志を出していいんだ」と思える体験を、伊藤先生は生徒に積ませたいと考えている。生徒の発言をできるだけ拾い、ある生徒の意見をまわりが馬鹿にすれば注意。生徒に書かせた感想をあとでシェアしたり、生徒同士で選歌させたりと、個々人の表現が周囲に受け止められる機会も意図的に増やしている。

2 教材を生徒の体験や興味とリンクさせ、「我がこと」として考えさせる

意志を表明しやすい場でも、そこで話すテーマが他人事のように思えると、生徒の関心は低く、意見が出ない。だから伊藤先生は、古典でも論文でも、生徒の体験や興味とリンクする部分をみつけて示し、生徒が「我がこと」に近づけて考えられるようにしている。意見を言いたくなる、とっかかりをつくるのだ。

3 書くことの積み重ねで生徒のなかに意見を育てる

意見をもつのが苦手な生徒には、小論文や感想文をくり返し書くことが打開策になると伊藤先生は感じている。言語化することで自分の考えがまとまることも多く、また、小論文作成のために多様な課題文を読むと、社会のさまざまなものごとへの理解が深まり、その問題に対する自分の意見も育っていくからだ。

4 年間の学習計画にマッチする人を探し、授業でコラボレーションする

文法を学ぶときに、英語の先生と組んで日本語と英語の文法を比較したり、竹取物語を学ぶときに、宇宙開発スタッフを招き、古代から現代までの月に寄せる思いを話し合ったり。生徒の興味を喚起するような協同授業は、無理なく行えるよう、伊藤先生は、学習計画に組み込む形での実践に努めている。

授業のミナモト

技術面の指導だけでは伝える力は身につかない

社会人大学院でキャリアデザインを学ぶ。伊藤先生がそう決断したのは教員生活22年目、2010年のことだ。「自分のやってきたことを統合した先にあるのが、キャリア教育と感じたから」だという。

国語の教員として、伊藤先生が抱えてきた問題意識は、文法などの表現技術を教えるだけでは、生徒の「自分を伝える力」が必ずしも高まらない、ということだった。中高生は自意識が強まるにつれ、否定

されることや間違えることを恐れて、素直に自己表現しなくなる。「もつと自分を出していいんだ、意志を表明していい」という感覚を養うことも大事ではないか。

課題があると「勉強できる場や先生とやる人を探す」「出会えた人と一緒に授業をできないか考える」というのが伊藤先生の習性。1998年には同じ問題意識をもつ男子校の先生と、二校間で生徒が短歌をやり取りして感想を伝えあう授業を行った。そしてその実践で、人が創作した作品からいいと感じるものを「選ぶ」という行為のパワーを知る。作品を選んで理由まで添えると、「相手の表現を受けとめて意見を返した」ことになる。表現を受けとめてもらえたほうはうれしく、「その感

想を自分はどう受けとめたか」を返したくなる。二校間で生徒たちは生き生きと意見を交わすようになり、伊藤先生たちは「受けとめて返す」ことがコミュニケーションの意欲を高めることを実感した。

2003年から、伊藤先生は、高校3年生向けに小論文の補習講座を始めたが、これも「自分を伝える力」に必要な要素を再認識する契機になる。

「受講した生徒たちは当初「自分の表現技術が拙いからうまく伝えられない」と考えていました。ですが小論文を書いていくと、それ以上に「自分の考えがはつきりしていないから伝えられない」「課題文に出てくる社会の問題をよく知らないから語れない」ということを、生徒自身が感じるようになったのです」

その問題はどうか克服すればいいのか。講座を通して伊藤先生が確信したのは、「頭の中での思いにふけるより、書いてアウトプットしたほうが生徒の考えは深まる」ということだ。だから、大学の志望理由、労働問題、医療問題、食と環境など、多様なテーマの小論文をどんどん書かせた。講座は生徒たちにとって、表現技術を学ぶだけでなく、自己認識や社会への理解を深める場にもなった。

教科指導も生活指導もキャリア教育につながった

国語教育とは別に取り組んできたこともある。駆け出し時代に不登校の生徒と



授業中に「歌に出てくる女性二人は知り合いだと思う?」などと、興味をもちやすい問いかけはさざと、生徒が意見を表明しやすくなる。

出会ったのを機に、伊藤先生は、カウンセリングを学び、悩みを抱える生徒を支援するための教育相談や保健部の活動に力を入れてきた。

それは目の前の課題に対応するためだったが、今ではこうした活動も、教科指導で目指すことと重なりあっている。

大人が支援するだけでなく、生徒が仲間同士でも支え合えるようになると、いわゆるピアサポートの活動を推進したが、それは「相手を受けとめて意見を返す」国語の授業実践と符合した。生徒の教育相談のために、「飽きっぽい好奇心旺盛」のように違う枠組みから物事を見つめ直すリフレーミングを学んだが、それは小論文講座で生徒が長所・短所をとらえ直して自己理解を深めるうえで役立った。

つまるところ教員の仕事とは「子どもが大人になる支援」なのではないか。もろもろの取り組みが融合するなかで、伊藤先生はそう思うようになったのだ。

授業のエネルギー

書くことが読む力に、
読むことが伝える力に

表現技術を教えるだけでなく、自己表現しようとする意欲を高めることや、その人ならではの意見を育てることも重視する伊藤先生の授業は、生徒の内面にも変化をもたらしていく。

授業で『伊勢物語』にふれた生徒たちは、感想文に「昔と今とで結婚制度が大きく違うことに驚いた。今のほうがいい」「私は夫婦でお互いに仕事をして、生計を立てていきたい」「色男にはあこがれるけれど、結婚するなら一途な人」などと自分の思いを率直につづらせた。今回の授業が、社会のあり方や自分の将来のことを考える一つのきっかけになったことが見てとれる。



OG
加藤靖子さん



写真は左からOGの加藤さんの高校時代の志望理由書、小論文講座の生徒の感想、伊勢物語の生徒の感想。こうした生徒の文章も同級生や後輩の学びに活用。ほかにも伊藤先生は、生徒全員に在校生に対して本の紹介をするブックガイドも書かせている。

小論文講座を受講した生徒のなかには、「自分の価値観が見えてきた」「前より自分の意見をもてるようになった」などと、授業を通しての自己の成長を実感している人も少なくない。10年近く前に伊藤先生の講座を取ったOGの加藤さん（写真左上）もその一人だ。

加藤さんは、もともとは国語がそんなに得意ではなかった。それでも受験対策のために小論文講座を受講し、書く訓練をしていくと、「文章の成り立ちがわかって、他人の文章も前よりしつかりと読めるようになった」という。

そうなる前から気づいたのは、「小論文は、書く前に課題文を読み込むことが大事」ということだった。相手の発言を受けとめてから自分の意見を述べないと、ピントはずれな文章になりやすいからだ。加藤さんは、先生が用意する多様なテーマの課題文を真剣に読むようになり、結果としてそれが「知らなかった世界を知る」ことにもつながった。好奇心が強くなり、以前はほとんど読まなかった本をみずから手に取るようになり、読書が趣味になった。文章にふれるうちになじみのある語彙も増え、表現の幅も広がった。

伝える力で 社会に働きかける

現在、加藤さんは、工場用機械などを扱う専門商社で、営業事務の仕事をしている。機械のユーザーであるお客さまから

の問い合わせに、メールや電話で応対していくのが主な仕事だ。

「相手が求めていることを、その相手の発言や文章から読み取ったうえで、必要なことを調べて文書などで回答します。こちらの考えをきちんと伝えたいといけない機会も山ほどあって、表現のしかた次第で、相手との関係は良くも悪くもなります。私がおつと言葉や表現を知っていれば、相手に正確に伝わっただろうに、と悔しい気持ちになることもあります。学生時代に自己表現力をみがくというのは、すてきなことだと思いますよ」

加藤さんが高校生の時に書いた論文は、ほかのOGの論文とともに、今でも伊藤先生の授業で生徒への参考資料として活用されている。先輩が自分たちと同じ年代の時に書いた文章というのは、現役の生徒にとつて何よりも説得力のあるお手本だからだ。

そうして先輩からも学んで鍛えた伝える力を、教え子たちには、この社会でまずは「自分を守る」ために生かしてほしい、と伊藤先生は考えている。「『こうしたい』『これはおかしい』などと思うことがあれば、その気持ちを押し殺さずに言ってみることを大事にしてほしいんです。拙い言葉でも、なぜそう思ったのかという論拠まで示せば立派な意見。そうやって一人ひとりが自分の意見を出していくことが、世の中を良くするものにもなると思います」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけさせたい力	現代文・古文・漢文の文法 ・文法的知識を踏まえた正確な読解力をつけさせる。 論文の構造 ・意見+論拠によって伝えることを理解させる。 文学史 ・文学作品にはその社会状況が反映するということが理解させる。	自己理解能力 ・教科書の題材などを「我がごと」に結びつけて生徒に論文や感想文を書かせ、「言語化して自分の考えをまとめている」訓練を積ませる。 他者と関わる力 ・生徒同士のワークや論文指導で「相手の表現を受けとめたうえで意見を返す」ことをさせる。 いいと感じるものを選ぶ力	意志を表明しようとする意欲 ・口頭や文章での自己表現がまわりに受けとめられる体験を積ませて、「自分の意志を表明しているんだ」という安心感や自信をもたらす。 社会への興味・関心 ・論文や感想文を書くことを通して「自分の意見をもつ」「考えを深める」には、社会への理解も欠かせないことを、生徒自身に気づかせる。
その力が将来にどう生きるか?	仕事や私生活での意思疎通に役立つ ・向き合った相手の発言を正しく理解することでコミュニケーションが深まる。これは外国語の場合も同様。 生き方や社会のことを深く考察できる ・古文や漢文になじみ、作品の理解も深まると、過去と現在の共通点や変化を踏まえて、これからの生き方や社会のあり方を考えていける。	志望動機や企画意図を明確に語れる ・自分に適したものを選ぶことや、やりたいことを自覚する力が高まり、受験や就職活動における志望動機や、仕事における企画意図を、他者に対してわかりやすく語れるようになる。 交渉やチームワークに強くなる ・交渉では相手の要望や意見を、チームの仕事では方針を受けとめたうえで自分の提案を返す。	自分を守ることができる ・やってみようと思えば表明し、理不尽なことがあれば抗議することで、自分の仕事環境や生活環境を、自分の手で守っていける。 世の中をより良くしていける ・社会に関心をもち、おかしな点や気になる点について一人ひとりが意見を出しあう、ということが、世の中の課題の解消につながっていく。